

事業創造型地域通貨の可能性に関する研究

平成 15 年 3 月

ひょうごボランティアプラザ

地域通貨は、一定の限られた地域で発行され、地域コミュニティにおける人と人との信頼に基づいて流通する貨幣です。現在、地域通貨は世界各地で実践されつつあり、わが国において稼働しているものだけでも130以上(準備中含む)に及びます。また、兵庫県内においても、「ZUKA」「らく」「かもん」「アスタ」「木見(こうみ)」などの他、準備段階のものも含めるとさらに多くの地域で取り組まれています。しかし、本来、地域課題の解決や地域コミュニティの活性化を図っていくうえで、注目を集めている手段・道具であるはずの地域通貨が、それ自体目的化している例も見られます。

このように、地域通貨は多様な展開を示していますが、もともとは低所得で失業率が高い経済的貧困地域におけるコミュニティ政策として提案されたもので、現在では新しい社会経済システムの構築という展望に基づいた実践へと移行しつつあります。しかしながら、地域通貨が地域経済にいかなる影響を及ぼしているのかについての検証はほとんど行われていない状況でした。

そこで、本調査研究では、「事業創造」に焦点をあて、コミュニティ・ビジネスや社会的起業、マイクロビジネス等への展開に係る総合的な研究を行うとともに、兵庫県多可郡八千代町をフィールドとして、実証研究を行いました。

この調査研究は兵庫県から委託を受け、神戸商科大学とひょうごボランタリープラザが共同して研究を行った初の試みですが、これを機に今後も両者の協働を探っていきたいと考えています。また調査研究にあたっては、地域通貨の意義と可能性に言及するだけでなく、前述の八千代町での実証研究の他既存の地域通貨を実践している45地域の協力を得てアンケート調査を実施し、他地域の状況についての調査結果をまとめ、できる限り実態の把握にも努めました。

この報告書が、地域通貨に既に取り組まれている、あるいは新たに地域通貨に取り組もうとしている方々の参考になればと思っています。

最後になりましたが、ご協力をいただきました八千代町の皆様のほか、多くのグループ・団体の皆様にはこの場を借りてお礼を申し上げます。

平成15年3月

神戸商科大学調査研究チーム
ひょうごボランタリープラザ

目 次

1	研究の視点	1
2	地域通貨の理論（事業創造と地域通貨）	3
3	事業創造の可能性からみた地域通貨の実態	12
4	事業創造型地域通貨のデザイン	21
5	八千代町における地域通貨導入提案	26
6	事業創造型地域通貨の可能性	34
6-1	地域通貨における ICT 導入の可能性と課題	34
6-2	環境と地域通貨	37
7	まとめ	40
資料編		
アンケート調査結果		
	「地域通貨からはじまる新しい“つながり”について」	42

1 研究の視点：転換期の地域経済と地域通貨の可能性－事業創造から地域経済の自律を考える－

地域通貨とは、限定された地域内においてのみ流通する通貨ないし域内取引の仕組みを指している。その発祥は19世紀のR.オーウェンの提案にあると言われるが、現在世界で展開しているこうしたタイプの仕組みは1983年カナダで開始されたものがモデルとなっている。本来、低所得で失業率が高い経済的貧困地域におけるコミュニティ政策として提案されたものであるが、現在では欧米各地においては、新しい社会経済システムの構築という展望に基づいた実践が試みられている。同様に開発途上国においても新しい住民参加型の開発パラダイムとして注目され、NGOを中心にした村落住民の組織化や農業技術の普及が試みられている。

近年における地域通貨の台頭はきわめて急速である。日本においても、計画段階のものも含めると100を超える地域通貨が存在しており、世界的には数百に及ぶと推測される。兵庫県下においても、「ZUKA」「らく」「かもん」「アスタ」「木見」、などの他、準備段階のものも含めるとさらに多くの活動が存在している。それでは、なぜこれほどまでに地域通貨が世界的な趨勢として顕在化してきているのであろうか。「限定した地域でしか通用しない通貨を用い、地域内でお金を循環させることによって、経済の安定化・活性化を図るとともに、グローバル化する経済によって崩壊しつつあるコミュニティを再構築する」(森野栄一 2001年)という「理想的」な地域通貨像の一方、現実の地域通貨に関わる多様な試みは必ずしもかかる姿になっていないとの批判もある。

例えば、世界で最も成功しているといわれるトロントダラーの主催者は、「セントローレンス・マーケット周辺での成功は、現在トロント全域に拡大する兆しを見せており、地域通貨と連動するコミュニティ政策により、以前多く見られたストリート・ピープル（ホームレス）は明らかに減少している」と指摘し、現在では教会をも巻き込んだ新たな試みが試行されつつある。ただ、トロントダラー成功の背景には、政治的にもきわめて強力なリーダーの存在など多くのトロント固有の要素があり、これを一般化するのは困難と言わざるをえない。

こうした活動は、本来個々の地域における課題解決や目的の達成のために「地域通貨」を手段・道具として使用しているものはずであるが、実際には多くの場合地域通貨自体が目的化している例も見受けられる。その意味で、多様な展開を見せ始めた係る試みがどのような「目的」を持ち、その成果・効果をどのように「評価」するのか、という視点での点検は重要な課題である。

地域通貨は先に述べたように多様な展開を示しており、これらを画一的な視点から点検することは困難である。そこで、本調査研究では「地域通貨を活用した事業創造の可能性」をテーマとして、現況把握、活動評価、社会実験、政策提案を行うことにした。もともと、

地域通貨は低所得で失業率が高い経済的貧困地域におけるコミュニティ政策として提案されたもので、現在では新しい社会経済システムの構築という展望に基づいた実践へと移行しつつある。地域通貨が地域経済にいかなる影響を及ぼしているのかについての検証はほとんど行われていない。そこで、ここでは「事業創造」に焦点を当て、地域通貨の可能性を明らかにしようとするものである。なお、ここでいう「事業」は、新しい社会経済システムに深く関わる社会的経済セクターにおいて大きな役割を果たしつつある、コミュニティ・ビジネスや社会起業家、マイクロ・ビジネスなどを意味している。

本研究では、百花繚乱とさえ思える地域通貨の現在の展開に対し、地域通貨の活用が事業創造にいかなるインパクトを及ぼし得るのかについて、総合的に検討を行ったうえで、社会実験実施のための事業創造型地域通貨のデザインを提案しようとするものである。

以下、「2 地域通貨の理論」では、経済学における貨幣理論からみた地域通貨の位置付けを行い、事業創造の可能性について理論的検討が行われる。「3 事業創造の可能性からみた地域通貨の実態」では、地域通貨のタイプについて整理した上で、地域通貨実施団体へのアンケート調査・ヒアリング調査に基づいて、わが国における地域通貨活動の実態を明らかにする。さらに、実際に事業創造の萌芽を有する「蚕都くらぶまーゆ」などの事例からその可能性について分析を行う。「4 事業創造型地域通貨のデザイン」では、事業創造の仮説論理モデルを提示したうえで、事業創造型地域通貨について一つのモデルを提示した。また、「5 八千代町における地域通貨導入提案」では、兵庫県八千代町における地域通貨の社会実験についてそのプロセスを示した。なお、ここで提案した社会実験は、準備時間が制約されていたことなどもあり、モデル自体を大きく変更して実施することとなった。「6 事業創造型地域通貨の可能性」では、ITを活用した地域通貨の可能性や環境をキーワードに、サステイナブルな地域づくりのための地域通貨活用の可能性についてとりまとめを行った。